
女子寮 Girl Meets Boy

矢藤勝海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女子寮Girl Meets Boy

【ZPDF】

Z9629F

【作者名】

矢藤勝海

【あらすじ】

「来栖、キミ…男だったのね…」「なんでクローゼットから登場するんですか、砂川さんっ！」春日辺女子高等学校付属寮で同室のマイペース少女+女装型美少年。甘口友情物語。

前からほつそい腰だなあとは思つてたけど、胸があんなにえぐれ
てるとは。

せつないよね。

胸のある子は走るとき邪魔、つづぶせになるとつぶれて苦しい、
かわいいブラ探すのに一苦労とはいうけれど、なかつたらなかつた
で寂しいものじゃない。わかるわかる。ぎりぎり滑り込みBです
から。

そつか。この断崖絶壁を隠すために、病弱美少女は体育も不参加
で、昔大怪我したから他人に着替えを見られたくないなんて噂まで
流して、今もこそ一人で着替えてるんだね。

……なんていうと思ったか。

同室で一年近く過ごしているのに、今まで気がかなかつたなんて、
我ながら鈍すぎる。
自分と彼女に同じく苦いものを感じながら、頭を抱えて扉を開けた。

「来栖…キミ、男だつたのね…」

「うわつ！なんで当然のようになにクローゼットの中から出でてくるん
ですか、砂川さんつーめちゃくちゃ怖いんですけど…」

うん、確かに怖いよね。クローゼットから出でてくる女。なんのホ
ラーだろ？。自分でもひくわ。

「それがさー、聞いてよー。ポーカーの負けがこんじやつてさー、狹
山のやつ、『罰ゲームだから、美少女のビックリした顔写メつ
きてえ。スナフ同室じゃーん』…とかいうのよーしゃーないから
隠れて驚かすこととしたんだけど、ホント面倒くさいことやらせん

なつて思わない？」

「……………そうですね」

「あ」

いつもの調子で同意を求めてしまつた」とに気づいて、「ほんと咳払いする。

「まあ 結果的には私の方がびっくりしたワケだけど。男よね
来栖 あきる 明君？」

じ」と彼の胸を見ると、来栖は恥らしくこの女のように両手で胸を隠した。

ちよこと
そんな」とされたら私が変質者みたいじゃなし

「……ち 違うんで うごく資格なんて う 聰いがしいので 特別
パツド十六枚で隠してるんです！」

いしゃれで!! 本当に貧乏なんです! 赤札たるけて夜逃げ寸前の脳なんですか!!!

「...」

アホだ

顔が美少女だから気づかなかつたけど、来栖は本物のアホだ。
私はクローゼットから飛び出した。

「あ。なんだかドラえもんみたいですね、砂川さん」

「うるさいよ、のび太っ！」

来栖といつもの世のほのボケシツ「//」をすねて、なんかせつない。

「アーリまでこいつなり覚悟はあるんだじょいね」

「覺悟？」

何も分かつていらない来栖は、小動物系の顔をちょこんと傾けた。

本当に大貧民な胸なだけだつたらどうしようかと思つたくなる可憐である。

しかし、手を抜く気はない。来栖と部屋の扉の間に立つと、さつ

と腕を組んで厳しい表情を作った。

「キミが本当に男じゃないなら、証明してよ」

「砂川さん…？」

「スカート脱いで、今、ここで」

「そんな…！生まれたままの私が見たいなんて、砂川さんの変
「違うわ、ボケツッ！…スカート脱げつていつただけじゃー下は
脱ぐなッ…！」

鋭くつつこんで、話をそらすとした来栖を遮る。

来栖は途方に暮れた様子だつたけど、最後にはがくつと肩を落とした。

「最悪だ…」

うなだれた半裸の少女、もとい、少年だつたわけだが　彼を見下し、わざとらしく笑う。

「最悪ね。いつてくれるるじやん。私じやなかつたら今頃晒し者にされただかもよ？」

「『めんなさい、別に砂川さんだからって意味じやなくて
「うん。わかつてたけどいってみた』

「……前から思つてましたけど、砂川さんていい性格してますよね
「よくいわれる。なんでだら、お淑やかで良心的な乙女の模範じやんねえ？」

につこり笑つていうと、来栖は首の限界まで目を逸らした。

「どういう意味かな、それ。

「なんで目を逸らすの、く・る・す・く・ん？」

「待つて、砂川さん、静かにしてください…」こんなとこ誰かに見られたら…」

「確實にこつらできてるなつて思われるね。私が来栖を襲つてる
ようにしか見えないし」

「砂川さんっ！」

春日辺女子高等学校付属であるうちの寮は、その手の[冗談が素面で噂話にされる恐ろしい世界だ。来栖の顔は完全にひきつっている。

「もつとも、キミのウルトラAマイナスカップが目に入らなかつたらの話だけど。露出狂じやないんだし、さつさと偽乳つけて服着ちやえば？」

さらりと指摘すると、来栖は顔を赤らめながら、内側に仕込みのあるブラとキャミをつけて学校指定のブラウスをはおつた。

見ていると、ボタンを留める手がぎこちないのなんの。

「といいなー。もつとちやつちやつと着替えらんないの？」

「……誰のせいですか」

「あら。今すぐ談話室に走つて、大人しい美少女として有名な来栖嬢の正体ぶちまけて欲しい？」

ちょっとびりいじめつ子氣分である。

扉に背中を預けて、にまにまと来栖の反応を待つ。

「……それもいいかもしない」

「え？」

予想外の返答に目を瞬かせると、来栖は鬱陶しげにリボンタイをしめて溜息をついた。

「プラジャヤーは窮屈だし、スカートは足が寒いし、いちいちスネ毛処理しなきや駄目だし、パンツは心もとないし、女子の制服つていことひとつもないですよ」

健全な男ならそうだろう。

見て可愛いのはともかく、自分で着てもねえ。

「わっかんないなあ。女装趣味じやないなら、来栖、どうして女子高來たの？試験もきちんと受けて、体育は総バス、身体計測関係は全部指定病院行き。他にも色々大変じやん。なのに必死で誤魔化してる。なんで？」

「それは……個人的な理由だから話したくありません

「ふうーん」

往生際悪く逃げた来栖を冷やかに見据える。

「オッケー、言い方を変える。来栖、何も話さないなら私はキミのことを他のやつらにつきだすしかない。いつとくけど、晒し者つて

のは脅しでいつたんじゃないよ。来栖もここで一年オンナやつてればわかるつしょ、女を集団で敵に回すどどつなるか。こここの女子寮生にとつちや、キミはカンペキ不審人物だし、きっと拾う骨も残らないね

「砂川さん…」

来栖は傷ついた顔をした。

おいおい、そんなに女生徒として換算して欲しかったのか?…
…なわけないか。

分かつてる。私に拒絶されて、裏切られた気分なんですよ、来栖。そんなの、私だつて同じだよ。

来栖と私は、この一年足らず、ひとつつの部屋で全てを分かち合つた。すごく仲のいいルームメイトだった。

「……友達だつたじやん、うちら。性別偽つただけの話じやないつてわかつてんの?私、騙されてたんだよ、よりによつて、一番仲の良かつた来栖に」

卑屈に笑つて口にした言葉に、来栖ははつとした顔をすると思いつきりタックル、じやなくて、私に抱きついてきた。

「ごめんなさい、砂川さん、ごめんなさい!」

「……」

ホントだよ。

お上品なサイズの胸が嘘なら、いつしょにいつた美容院で女の子らしこつてほめた髪も嘘、コスメ売り場で私がファンデつけた時にかんだ顔も嘘で、カラオケでちよつと低めなのが恥ずかしいつていつた声も、みーんな嘘だよね。……それってあんまりじゃないの。黙つている私を、来栖はほつそい体全部使つて、ぎゅううと抱きしめた。

知つてゐる香りと長い髪。子どもみたいに高い体温、泣き出しそうに震える、来栖の声。

「ごめんなさい…嘘だらけの友達で、本当に、ごめんなさい…」

……そうだね、自分でも意外なほど傷ついたよ。それでも、私に

しがみついてるこの来栖は「本当」だつたらつて、まだ思つてゐ。だつて、ズルイんだ。来栖の嘘つきな髪から、一人で馬鹿話しながら一時間かけて選んだシャンプーの香りがしてくんの。

来栖と過ごした時間、全部が嘘だつたわけじゃないつて、本当だつたものも同じくりいいっぱいあるつて、私に訴えてる。

信じてみようか。私を抱きしめてる友達は、「本当」だつて。

「来栖の事情、話してよ」

「…でも」

「友達なら、面倒抱えてないでちやちやっと相談しろつてえの。アホ」

「ん。……ありがとう、砂川さん」

「ハイハイ。つーかさ、キミ、やつぱ下あるじyan」「すすす砂川さんーッ！ドコ触つてんのーッー！」

大慌てで飛びのいた来栖に、やらしく笑つてみせる。

「えー。いつて欲しいの？」

「いい！いわなくていいつー！」

来栖は一人で騒いでどつと疲れたようだ。小動物系のキラキラ目がえらく恨みがましい。

思いついて飲みかけだつたスポーツドリンクを投げてやると、嬉しそうに笑つて飲み始めた。単純なやつめ。

それにも……いくら見た目が私より美少女でも、上がなくて下がつてるとなると、今まで間違いが起こらなかつたことが不思議。ほんとハーレム状態じやん？平気なもん？

しかし、ここでも来栖は私の想像の上をいった。

「砂川さん 同性愛つて、そんなにまずいものかな」「ハイ？」

「一せいあい？何？」

「オレ、親に病気つていわれたんだよね。でも、の人らも十分病氣。『いくらおまえがおかしくても、女子高になら一人くらい好みの女がいるだろ?』ってさ。時代劇の大奥じやないんだから…バカだろ?」

すみません、私もさつきハーレムとか思つてました。バカです。といふか、さすがに気づいた。間違いなんか起こらないはずだ。

「 来栖は男が好きなんだ?」

「ん。中学の時、好きになつた相手が男子校の友達だつたから。卒業前にどうしても告白したかつたんだけど、母親に書きかけのラブレター読まれちゃつて」

「ラブレタあ? 来栖、キミ、何時代の人間? 携帯電話もつてなかつたの?」

「……人が真面目に打ち明け話してゐる時にツツ「ミ! ありがとう。オレの学校じゃメールより主流だつたんですねー」

あ、ふくれた。リストだ、リスト。

「そりなんだ。まあ、メアド手に入れるのもけつこう面倒だし、恋文なんて乙女チック、じゃない、硬派な所だね、来栖のガツ」
「砂川さん、下手なフォローはいらないから」

「あはは! ゴメン、話続けちゃつて」

例の美少女顔で睨むと、来栖は首を振つた。

「それだけだよ。母親がパニック起こして、家族にカミングアウトした途端ホテルに軟禁、後は親父にここに押し込められて今に至ります 来栖明の物語は、それでお終い」^{オレ}

少しおどけた調子でしめくくると、来栖は疲れたように座り込んだ。

いつもしてゐる女の子ずわりじやなくて、スカートで胡坐モード。でも、開き直つたつて顔じやない。色んなことに疲れて、もう全部どうでもいい、そんな顔してゐる。

「 来栖はどうしたいの?」

「さあ? どうしたいのかな、自分でもわからない」

「「」から出たら、どうなんの？」

「……決まってるよ、また違う何かに押し込められる」

来栖は笑った。

仕方ないって顔で笑った。

すく、ムカついた。

「 いればいいじゃん」

「え？」

「え、じゃない。ここにいればっていったの」

「だつて、……いいの、オレ」

「いーんじゃないのー。誰も来栖の女装に気づいてないし、誰かに迷惑かけてないし？」

「でも、砂川さんには迷惑かけるかもしねり」

「へえ？じゃあ、今まで私は迷惑かけてなかつたって？」

「そうじやない！でも、もっと面倒なこととかあるかもしねりなくて、そうなつたら、今のオレはきっと砂川さんを頼りにしちゃうし」「だーかーらー。そういう面倒事を友達に相談しきつて、さつきからいってんですけどー。一度も言わせるなつての」

「でも…あの、」

「なに？」

来栖はいいかけた言葉をぐつと飲み込んで、恐る恐る、私に手を差し出した。

「砂川 元子さん、本当の来栖明と友達になつてくれませんか？」

聞いたことないメチャクチャ真面目な友達プロポーズ申し込み。

びっくりしたけど、すぐに笑つてその手をとつた。思つてたより

でつかかった手を、私の両手でぎゅっと握りしめてやる。

「当然つしょ。来栖みたいな面白い友達、私が逃がすわけないじゃ

「

ん。すじく嬉しい

「おお。素直だな、来栖。外見が美少女とはいって、さすがにちょっと照れる。

でも、私の隣にいる時は、そつやつて幸せそうに笑えばいいんだ。仕方ないとか、どうでもいいなんて顔は、しなくていい。

そんだけ。

いつか口を出で、私が隣にいなくなつても、ちゃんと今みたいに笑えるキリになつて欲しいって心から思つてゐよ、来栖。

でも、それはそれとしてね。

「来栖ー、友達更新記念に写メとらじしてよ」「更新記念…砂川さんらしきよね。いいけど」「じゃあ、携帯のほう見ててね。さん、こ」「いぢ、という代わりに、私は来栖の頬にキスをした。

「…」「カシヤツ！

「……す…砂川さん、今のつて…」

「「」めんねー。一応、罰ゲームだからさ、やつとかなこと「うわわー」のよ」

「……」

よしよし、うまい」と来栖だけとれてゐる。

男が好きな来栖には大したことないだらうと思つてたけど、インパクトは十分だつたみたい。めっちゃびっくりした顔で固まつてゐる。

「砂川さんで」

「うん?」

「実はけつじう考へなしだよね…」

「あー、やうかも。これからポーカーはせじせじにするわ。またこのんなのくじつたらたまんないし」

「……ポーカーのことじやないんだけど」

「なに」

「なんでもないです…」

なんだ、その疲れきつた溜息は。

来栖を不審な顔で見つめると、苦笑にして「本當になんでもない」といった。何なんだ。

「なんでもないなら狭山んトコこいつてくわよ、罰ゲーム終了つてついでに自販機で買うもんある?」

小銭用の巾着をひつぱりだして聞く。

「別にないけど」

はいはこ。その割には、何か言いたそうな顔しますよー。

「くーるーすー。『けど』の続きはー?」

しゃーないのでつついちゃると、来栖は照れたよつこはにかんだ。

「ん。……こいつらしさい、元子さん

うぐつ。

そ、そつきたか…恥ずかしいやつめ。

「……こいつときマス、明」

「」によじによじにして、逃げるよつこ廊下へ出る。いい加減、私
もつつきあいがいこいつーか、甘こいつーか。

まあ、あれもこれも、少しずつ慣れるでしょ。

ゆつくりたくさん楽しめばいい。来栖と私の時間は、まだまだい
つぱいあるんだから。

ちなみに。

この玄関先の挨拶が恒例になつたせいで、一年目には公認バカツ
ブル扱いされるはめになり、流されるまま、三年目には「校内NO.
1お姉様ズ」として不動の地位を築きあげ、卒業するまで周囲の誤
解は解けないままだつたりする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9629f/>

女子寮GirlMeetsBoy

2010年10月8日15時21分発行